

## 「イサクの誕生」

2021年01月22日

サラは言った。「神は私を笑わせてくださいました。このことを聞く人は皆、私を笑うでしょう。」また彼女は言った。「サラが子どもに乳を飲ませるなどと、誰がアブラハムに言うことができたでしょう。しかし実際、私は年取った夫に子どもを産んだのです。」(創世記 21 章 6 節～7 節)

アブラハムの妻サラは、最初に、創世記 11 章 30 節で「サラは不妊で、子どもがなかった」と紹介され、不妊の女であることが強調されて登場している。サラは、夫アブラハムに従い、見知らぬカナンので、羊と牛を追う厳しい生活を耐え忍んできたであろう。そのサラは、これまでのアブラハム物語において、意思と感情を表したことが三回ある。一回目は、子どもが生まれないので、アブラハムに女奴隷ハガルを与え、子どもを得ようとした時である。「主は私に子どもを授けてくださいません。どうか私の女奴隷のところにいらしてください。そうすれば私は彼女によって、子どもを持つことができるかもしれません」と言っている。二回目は、ハガルがアブラハムの子を身ごもると、サラを見下すようになった時、「彼女は身ごもったのが分かると、私を見下すようになりました。主が私とあなたとの間を裁かれますように」と、アブラハムに苦情を申し立てている。三回目は、神が旅人の姿をとって、アブラハムに現れ、サラに子どもが生まれるというみ告げを後ろにある天幕の入り口で聞いた時、「老いてしまった私に喜びなどあるだろうか。主人も年を取っているのに」と心の中で笑った。サラの意思と感情が表れたこの三回から、サラは子どもが生まれぬことに深い悲しみを抱えていたことが分かる。子どもを産むことが、妻の何より大事なことを考えられていた時代であるから、サラの苦悩は深いものであった。

神は幾度も、アブラハムに子孫への祝福を語ったが、アブラハムも信じられず、サラの申し出を受け入れ、ハガルにイシュマエルを産ませた。また、ひれ伏して神の言葉を聞いていたが、心の中で笑い、イシュマエルへの祝福を求めたりした。ところが、神がアブラハムに子どもを与え、その子孫は大きな祝福に与るという約束は現実となった。彼女は身ごもり、年老いたアブラハムに子どもを産んだ。アブラハム物語は、人間は不誠実で不信仰であるが、神の約束の言葉は、必ず貫徹されることをテーマにしている。

アブラハムは、自分の不信仰を超えて、約束を守られる神に畏れをもって、心からの感謝を捧げたことであろう。生まれてきた子どもに、神が命じられたようにイサクと名付けた。また、生後八日目に、神との契約を結んだ時、命じられた割礼をイサクに施した。この時、アブラハムは百歳、サラは九十歳であったという。

サラの喜びはいかばかりだったであろう。聖書は、「サラは言った。『神は私を笑わせてくださいました。このことを聞く人は皆、私を笑うでしょう。』また彼女は言った『サラが子どもに乳を飲ませるなどと、誰がアブラハムに言うことができたでしょう。しかし実際、私は年取った夫に子どもを産んだのです』」と記している。神は私を笑わせてくださった。この笑いは、天幕の陰で、子どもが生まれるなどありえないと笑った笑いとは全く違う。心の底からの喜びに満たされ、神の言葉の真実さを畏れ、感謝の笑いであった。年を取った私が子どもを産み、人は笑うでしょう。笑われて当然、そして、結構。私は子どもに乳を飲ませ、年取ったアブラハムに子どもを産んだ。イサクは「笑う」という意味であるが、神の約束の成就を、サラは鼻先で笑う笑いから、本当の笑いを得たのである。